

且夫飲食時アルニアラザレバ、馬羸繁息ナシ難シ、晝ハ午申ノ時ニ槽ヲ進メ、夜ハ戌子寅ノ時ニ槽ヲ進ム、一日一夜ニ五次、四時其別ナシ、春夏ハ穀料ヲ減ジテ芻水ヲ増、秋冬ハ芻水ヲ減ジテ穀料ヲ益、御人日夜馬ノ側ヲ去ズ、其形狀ヲ察テ食料ノ多寡ヲ度レ、御人若志切ナラザレバ瘡癩言コト能ズ、或ハ飽或ハ飢テ忽肥滿シ羸瘦ス、抑馬ハ飲食度ニ合ヒ、乘騎節ニ中リ、洗浴法ニ應テ而テ後ニ馳驟則アリ、三ノ者若其一モ缺ルトキハ、百馬ニ一モ繁息スルコト能ズ、學者意ヲ留テ子細ニセヨ、

又曰、凡牧養スルニ、未明ニ馬ヲ轡ラニ移シテ頭ヲ高ク繫ギ、馬刷ヲ以テ身體ヲ掃除セヨ、日々ニ洗浴ヲ失スルコト勿レ、若四蹄及ビ鬣毛ノ上リニ瘀血生ゼントスルガ如キハ、洗浴ノ後速ニ食鹽ヲ傳ヨ、總テ洗浴足ザルトキハ、則氣血流通セズ、脈絡閉塞シテ身體詰屈ス、抑乘騎洗浴芻穀ノ三ノ者全ク調フニ非レバ、駿馬ト雖ドモ疾歩スルコト能ズ、馭人心ヲ切ニセヨ、

〔牛馬定目留書〕寛政十一己未歲十一月、上杉様衆より牧馬取扱方問合、箇條書江依御沙汰御答書附札書上帳、

松尾紋左衛門

一十一月八日、卯ノ刻付、御用人方々之御用狀到來左之通、

一筆申達候、上杉彈正大弼様衆々、別紙之通問合之趣、江戸表々申來候處、一體指圖いたし差越候儀者難相成事ト被存候得共、先心付之義共、附札仕、自分被相越候砌、持參可被申候、尤右書面之内、牝牡之處難相分被存候、尙問合申越候間、被相越候節可申達候、是又爲心得申入候、以上、

十一月八日

御用人中

松尾紋左衛門殿

其御許様御領内ニ而、牧馬之事者、御地も雪國之由ニ候得者、冬分は放牧之馬共、皆以民家之厩江牽入候事之由、何月頃牧江相放、何月頃厩江牽入候事ニ御座候哉、